

平成 30年 2月 27日

研究科長 殿

審査委員

主査

成瀬 秀夫

副査

小山 浩司

副査

橋本 昇



学位論文審査報告書

学位申請者	保健医療学研究科 保健医療学専攻 平成 27年度入学 氏名 福田 翔	学籍番号	5215002
申請学位	博士(柔道整復学)		
学位論文題目	柔道選手における肘関節損傷に関する研究		
成績	合格		
審査期日	平成 30年 2月 13日 ~ 2月 23日		

- 注 1 論文審査の成績は、合格又は不合格とする。
2 学位論文審査要旨を添付すること。

学位論文審査要旨

審査委員

主査 成瀬 秀夫

副査 小山 浩司

副査 橋本 昇



学位論文提出者

保健医療学研究科 保健医療学専攻

平成 27年度入学

氏名 福田 翔

学位論文題目

柔道選手における肘関節損傷に関する研究

学位論文審査の要旨

柔道整復は歴史的に柔道と深い関りをもって発展してきている。柔道では、その競技の特性上、骨折・脱臼・捻挫・軟部組織損傷などがみられる。背負投げを得意とする選手や関節技をかけられた時、相手に投げられて手をついた時などにみられる肘関節損傷は、柔道において比較的多く発生する損傷である。

本研究では、まず大学柔道選手1030名を対象として柔道における肘関節損傷の実態調査を行なった。その結果、肘関節損傷の既往を有する選手の割合は31.7%(326名/1030名)であり、好発部位は釣手側の内側部で、受傷時期は関節技が許される高校生以降に好発していることが明らかとなった。

次いで、近年柔道整復師の臨床現場で頻用されている超音波画像装置を用い、各肘関節屈曲角度(30°, 60°, 90°)における肘関節内側側副靭帯(尺側側副靭帯)(UCL)の厚みと長さの測定の信頼性を検討した。その結果、超音波画像装置によるUCL像の測定信頼性は、検者間および検者内ともに高値を示し、肘関節屈曲角度(30°, 60°, 90°)によって違いを認めないことが明らかとなった。

また、肘関節損傷の既往のない柔道選手71名(142肘)を対象に、ストレス超音波検査を用いて、肘内側部の形態(UCL厚、UCL長、腕尺関節裂隙間の距離)を釣手側と引手側の比較および学年別(中学生、高校生、大学生)の検討を行った。その結果、肘関節損傷の既往を有しない柔道選手の釣手側UCL厚は引手側に比べ肥厚していること、さらに釣手側の腕尺関節裂隙間の距離は学年間で異なることが明らかとなった。

柔道選手の肘関節損傷の危険因子を究明するため、肘関節損傷の既往のない柔道選手71名(142肘)中、追跡調査が可能であった49名の若手柔道選手を対象に1年間の前向き調査を実施した。その結果、新たに発生した肘関節損傷の頻度は16.3%(8名/49名)であった。また、釣手側UCL厚を肘関節損傷の有無で比較したところ有意差を認めなかったことから、釣手側UCL厚は肘関節損傷の危険因子でないことが明らかとなった。

本研究により、柔道における肘関節損傷の実態が明らかとなり、また、柔道整復師が使用可能な超音波画像装置を用いての肘関節UCL像描出時の測定信頼性が明らかにされた。さらに柔道における肘関節損傷の危険因子について言及している。本研究の手法は肘関節以外の部の損傷の研究にも応用可能であり、これからの柔道整復分野の研究に有用であり、十分に学位に値する論文であると考える。

(主論文掲載誌)

・柔道選手のスポーツ傷害と性差の関連性,日本柔道整復接骨医学会誌Vol.26, No.3, 2018

・Reliability of the Collateral Ligament of the Elbow Assessed Using Musculoskeletal Ultrasound
東京有明医療大学雑誌2018 Vol.10 掲載予定